

下関市国際交流員 李 佳琦
(中国山東省青島市派遣)

「新たなライフスタイル in 青年老人ホーム」

下関市国際交流員の李佳琦(リ カキ)です。若者としてこの時代で生まれ、一生懸命に生きていくのが大変だなと、私と同じように思う方もいらっしゃるでしょう。疲れたときに、皆様はどうやって自分を癒してきましたか。本日は、中国の若者の新しい癒し方、そして新しいライフスタイルについてご紹介したいと思います。

「青年老人ホーム(青年养老院)」という言葉を目にした方はいらっしゃいますか。私も今年の夏頃に初めて聞きました。なぜかという、今年から中国で流行り始めた言葉だからです。

「老人ホーム」の概念については皆様ご存じですよね。高齢の方が施設に入居し、介護などを受けてりしながら集団生活を送る場所です。中国の老人ホームは一般的に郊外にある庭付きアパートで、個室の居室に加え、食堂や多目的スペースが併設されています。三食が提供される上、家賃は一般のアパートよりはるかに安いので、大都市で働いている若者の目をひいていました。そして去年あたりから、老人ホームで暮らす若者が現れ始めたのです。

若者の老人ホームの入居に対しては、「入居料金が安く、経済的に負担が軽い」「自分では料理できず、出前ばかり頼むのも体に悪いし、三食付きは良い」という賛成の声に対し、「若者が老人ホームに大勢入ったら、老人はどうするのか」という反対の声もありました。こういった声を踏まえ、青年向けの老人ホーム、「青年老人ホーム」が生まれました。

一般的な老人ホームと同様、青年老人ホームも庭付きのアパートで、食堂や多目的スペースの他、図書室や喫茶スペース、ゲームセンターなどがあり、安い料金で個室に住むことができます。また、入居条件が、45歳以下、職務経験ありといった程度であることから、フリーターやニート状態に陥った若者から人気を集め、現在では供給が需要に追いつかない状態のようです。



さて、青年老人ホームのライフスタイルはどのような感じでしょうか。併設された池で入居者と一緒に船をこぎながら蓮の花を採ったり、夕方にかがり火を囲んでお茶を沸かしながら談笑している様子をニュースで見ると、「ユートピア（乌托邦）」という一言が頭から離れなくなりました。

現代の中国はまさに「内卷（内卷）」時代の真っ只中で、学校での競争、就職のプレッシャー、仕事の重圧、家庭のストレス、育児の負担……一息をつくこともできず、自ら歩いていくどころか、時代の流れに逆らうことができないままてくてくと先に進む、進まなければならない、進まざるを得ない、といった気持ちで生きている若者が大勢います。そういう「内卷」のライフスタイルに対し、「横わたり（躺平）」たいという声もだんだん上がってきました。横わたり、体と心を少し休め、仕事と生活のバランスを考えた生活を送りたい。

このようにして、青年老人ホームの時代が幕を開けました。

20代、30代はデジタル時代に生まれた世代で、デジタルを通じて人間関係を築くことに慣れすぎました。それと同時に、リアルでの人間関係はなかなか広がらず、孤独感に苛まれ、帰属感に乏しいといった問題にも直面し、人とのつながりを求め始めてきています。青年老人ホームで暮らしている若者は基本的に、スマホやパソコンから離れ、対面でのコミュニケーションや伝統的なゲームを中心に、人との触れ合いを増やす機会を掴んでおり、素朴なライフスタイルを楽しんでいます。

私も一人っ子でデジタル世代に生まれた若者の一人です。今のところ、そこまでのプレッシャーやストレスを感じてはいませんが、もしかすると一息つきたいという時期が訪れるかもしれません。その時は、青年老人ホームでしばらくの間心を休め、ゆったりと生活を送っていくかもしれませんね。その場合は、ぜひ温かい目で見守って下さい^^